

福島県男女共生センター 公募研究レポート

福島県男女共生センターでは、男女共同参画社会を実現するうえで取り組まなければならないさまざまな課題を把握し解決の方法を探るため、学術的専門研究を行い、全国・世界に発信するための公募研究を実施しました。

平成15・16年度公募研究

男性の性意識に関する実証的研究

—セクシュアリティの歴史的表象と性風俗産業のフィールドワーク—

概

要

研究代表者 和崎春日（名古屋大学大学院文学研究科教授）

研究分担者 田淵六郎（名古屋大学大学院環境学研究科助教授）

光石亜由美（中部大学非常勤講師）

松田さおり（那須大学非常勤講師）

I

研究目的

近年、ジェンダー平等の実現にむけて、政府や地方公共団体による施策や取り組みが進められつつある。実質的な男女共同参画社会を達成するためには、男女の機会均等のみならず、男女を区分している「性」にまつわる意識や行動を変革していくことが肝要となる。しかしながら、男女の「性」の意識や行動は、従来、慣習的、道徳的規範に基づく自明のものと捉えられ、その中に潜む「性」のバイアスは隠蔽され、温存されてきた。

本研究は、これまで研究の対象となることの少なかった「男性の性意識」に光を当て、とくにそれが、性風俗産業（以下、「性風俗」とする）を代表とする「商品化された性」との関係でどのように存在しているのかを明らかにすることを目的としている。実証的な調査研究を通じて、男性の性にまつわる意識や行動の現状を把握するとともに、その問題点を明らかにすることを企図している。

II

調査の概要

本研究では、人類学的なフィールドワークや定量的サーベイなどの方法論に基づいた共時的研究、歴史学（社会史）などの方法論に基づいた通時的研究を交差させつつ、4つの方向から男性の性意識についてアプローチした。

まず、質問紙調査において、福島県郡山市、愛知県名古屋市緑区の成人男性を対象として、性風俗に対するイメージ、「性」に関する意識の現状を調査した。次にこうした性意識を支える前史として性風俗の歴史の変遷および現状を文献から調査した。次に、福島県（郡山市）の性風俗に関連する現状を把握するため、繁華街での野外調査および、飲食店、風俗営業等の同業者を対象とする野外調査を行った。最後に、男性の性に関する意識や性風俗をめぐる意識の実情を明らかにするため、性風俗の経営者・従業者、性風俗の利用経験者を含む、成人男性を主な対象とした聞き取り調査を行った。



結果の概要

(1) 男性の性意識についての質問紙調査

福島県郡山市、愛知県名古屋市緑区の成人男性を対象として、「性」に関する意識の現状を把握するために、郵送法による質問紙調査を行った。

標本対象：福島県郡山市及び愛知県名古屋市緑区在住の20-60歳の男性

標本抽出：選挙人名簿からの系統抽出法

配布方法：郵送法（平成15年3月配布、その後督促はがきを1回郵送）

調査期間：平成15年3月23日—4月12日

標本数：2,000

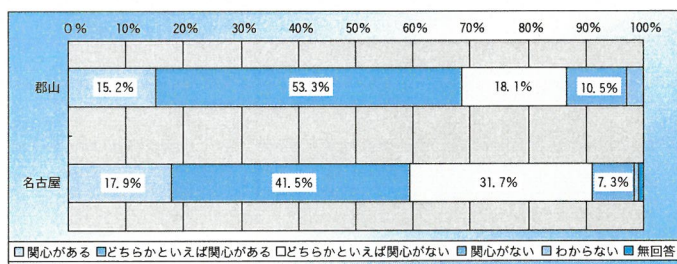
総回収数：232うち有効回答数228（有効回収率11.4%）

調査票は、性風俗についての意識およびセックス（性行為）のイメージを主たる調査項目とした。以下、いくつかの項目を抜粋して紹介する。

1) 性風俗について

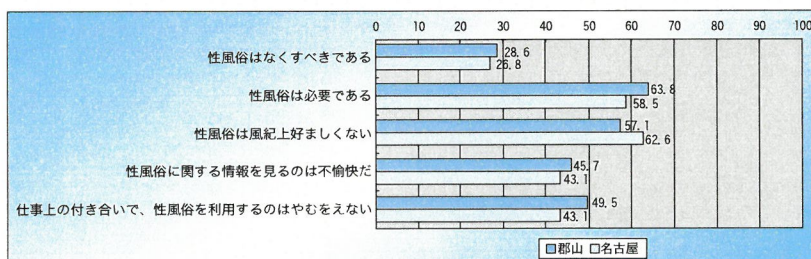
「性風俗に関心がありますか」という質問に対しては、「関心がある」「どちらかといえば関心がある」と答えた「関心層」は全体で6割から7割ほどであり、性風俗への関心の高さがうかがえる。

性風俗についての関心（地域別）



N = 228（郡山105、名古屋123）

性風俗について（「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と答えた人の比率、地域別）



単位%、N = 228（郡山105、名古屋123）

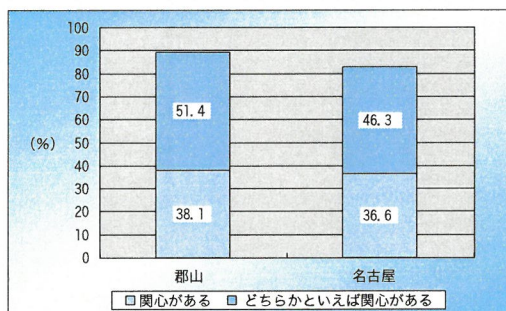
性風俗をめぐるさまざまな意見についてみると、「風紀上好ましくない」に賛成する人の比率が6割程度である一方、「必要である」と性風俗になんらかの必要性を認める人の比率も6～7割に上っている。仕事上の付き合いでの性風俗の利用を「やむをえない」とする人も全体で5割近くおり、性風俗に対する「モラル」と現状の乖離が推測される。

男性が性風俗を利用する理由に関する項目では、「生理的な欲求」(91.7%)、「癒しやぬくもり」(57.9%)、「日ごろの性行為に不満」(42.1%)、「征服欲・支配欲を満たすため」(26.8%)となり、全体の9割が「生理的な欲求」だと考えている。

2) セックス(性行為)のイメージについて

「あなたはセックスについてどのくらい関心がありますか」という質問に対し、「関心層」は、郡山市、名古屋市いずれの地域においても、8割以上であり、関心の高いことがわかった。

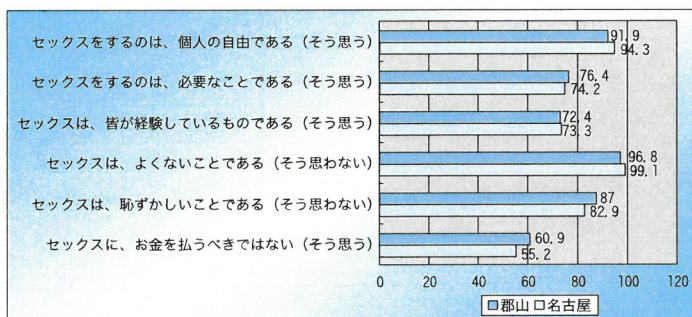
セックスへの関心(地域別)



N=228 (郡山123、名古屋105)

セックスをめぐる意見についてみると、「セックスをするのは必要なことである」、「セックスは皆が経験しているものである」は、両地域とも7割以上の方が「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と答えている。また、「セックスはよくないことである」「セックスは恥ずかしいことである」については両地域とも8割以上の方が「そう思わない」「どちらかといえばそう思わない」と答えている。しかしながら、「セックスにお金を払うべきではない」という設問についてみると、「そう思う」「どちらかといえばそう思う」と答えた人の比率は両地域で5～6割に止まり、他の設問に比べ意見が分かれた。

セックスについての規範、見解(地域別)



単位%、N=228 (郡山105、名古屋123)

(2) 戦後、性風俗産業の歴史的変遷

性風俗に関する法改正や経済状況等めやすとして、戦後の性風俗の変遷を4期間にわけて考察した。戦後、性風俗は時代とともに、様々な変遷をたどっているが、大きな変化として、①性風俗の営業種の多様化、②メディアの発達による性風俗の情報化、③性風俗の日常生活への拡散が指摘できる。

戦後の性風俗は、赤線などの売春の形態から、ソープランド、ピンクサロンなどの射精サービスの業態へ、そしてファッションヘルス、韓国エステなど、射精サービスも含めた全身マッサージを特徴

とするサービスの業態へと、提供される性的なサービスの内容が変化しており、射精、セックスそのものへの偏重から、顧客のさまざまな「ニーズ」に答えるべく多様化していることが示された。

また、近年の携帯電話、インターネットなどのメディアの発達も性風俗に影響を与えていることが指摘できる。これらのメディアによって、誰でも、どこでも、簡単に、性風俗の情報にアクセスできる環境にある現状が認められ、これまで赤線、風俗街といった特定の囲こまれた空間にあった性風俗が、日常生活へと浸透・拡散する傾向が確認された。

(3) 郡山市野外調査

福島県郡山市の駅前近隣を中心に野外調査を行った。郡山駅前には1980年代の再開発事業により、大型百貨店を中心に商店街を結ぶ「商業の回廊」を形づくることで経済振興、街づくりを行ってきたが、不況などの影響により、商店街の空き店舗に性風俗店が営業を始めるなど、商業地区への性風俗店の進出が目立っており、生活空間と性的な商空間が混じりあった空間が作られている。しかしながら、このような商業地域においては、性風俗に対して、近隣の商店・飲食店などから、自発的な排除の動きがあること等も明らかになった。

(4) 男性の性意識についての聞き取り調査

性風俗の利用経験者を含む20-50代の男性（13名）、および性風俗店経営者・従業者（男性2名、女性2名）に対して、半構造化した質問による聞き取り調査を行った。

性風俗産業経営者・従業者への聞き取り調査では、風俗営業適正化法の改正による規制範囲の拡大によって、「健全化」した性風俗店の多いこと、単に性的な欲求を解消するのではなく、ふれあいやコミュニケーションなどへの欲求を重視する利用者が多くなっていることが確認された。20-50代男性への聞き取り調査では、性風俗全般について関心があり、必要なものとみなしながらも、それらを自分とは無関係の世界と捉える意識が認められ、男性の性欲の自然さを前提とし、その前提に依存した思考様式が作られていることが示唆された。また、性に関して語り、学習する場がほとんどないために、同性の友人・仲間、雑誌、インターネット、アダルトビデオ等といった、偏りがあり、断片的で、かつ不確かな情報に基づいて性に関する知識の習得が行なわれていること、結果として性に関する意識、性に関する悩みや、性に関する疑問などが取り残されたままであることが指摘された。

IV

まとめ

本調査を通じて、性風俗に関して興味関心を抱き、ときに利用者、消費者となりながらも、自らの性意識や性風俗のかかえる問題に対して、無関心でありつづける男性の意識の実情が明らかになった。これは、男性の性的な欲求が「自然なもの」であること、「必要なもの」であることが、意識のレベルで自明視されるために、性風俗やそれを利用する男性の行動までもが、「自然さ」や「必要性」のもとに語られてしまうことによると考えられる。男女の性のありかたをめぐる「幻想」が温存されてきた原因の一つを、ここに求めることができるだろう。近年、メディアの発達により、性や性風俗に関する情報が氾濫しつつある。こうした状況に照らし合わせても、性について関心をもたないようにする、あるいは成り行きにまかせるのではなく、それを「適切」に読み取る能力の向上を進めていくこと、そして一人一人が自己の意識をみつめなおすために、性についての悩みを考える場、語り合う場を提供する地域ネットワーク型の組織をつくるのが有効だと考えられる。こうした活動は、男性が自らの意識、行動に潜む問題に気づき、それを乗り越えることにつながり、よりよい男女共同参画社会の実現に寄与するものと考えられる。